

秦俑髮型小考

小柳美樹

要旨

秦始皇帝陵兵馬俑の髮型は「扁髻」と「円堆髻」とに大別される。職位・階級が表出されているといわれるが、長髪が流行し、円堆髻の多くが右側に位置することは当時の習俗・右を尊ぶ観念「尚右」を伺うことができる。

秦俑髮型の復元を通して、髪のはきはきは背中中部程が適当であり、習慣化すれば単独で整髪することが可能であることが理解できた。

円堆髻を右側に位置付ける俑が多いながらも、一定の割合で左側に位置づける俑も確認できることは、今後の検討課題となる。

キーワード：秦，兵馬俑，髮型，習俗，復元

はじめに

1974年に発見された秦始皇帝陵兵馬俑坑は中国王朝の威光を雄弁にも語る資料だけではなく、当時の生活風俗をも表出した資料であると言える。人物俑を観察するだけでも、その容姿・服飾はもちろんのこと、そこから導きだされる軍団構成や社会構造を解明する糸口となっている。

精緻に再現した頭部の造形にも、冠の有無や頭巾の有無、髮型の細かな相異が生き生きと確認できる。発見以来、すでに多くの考察と議論が交わされているが、改めて頭髪について整理し、今後の展望を図りたい。

1. 秦俑髮型について

秦始皇帝陵兵馬俑から出土した人物俑の髮型は、冠や頭巾の装着事例を除けば、「扁髻」と「円堆髻」とに大別される。扁髻は六つに編みこんだ頭髪もしくはそのまま束ねた頭髪を後頭部より折り曲げてもち上げるスタイルであり、冠を載せる人物俑と載せない人物俑

サイバー大学世界遺産学部・准教授

原稿受付日：2011年2月1日

原稿受理日：2011年2月10日

が確認できる。一方で、円堆髻は頭頂部横で髻を結っているものであり、頭巾を被っている人物俑と被っていない人物俑に分けられる。基本的に人物俑にみられる髮型は長髪である。

何故長髪なのかという疑問が浮上するものの明確な回答は出されていない。頭髪に靈魂が宿るといふ説もみられる⁽¹⁾。基本的にその当時の風俗や流行に則った行為であったことを第一義に理解せねばならない。戦闘に明け暮れた生活習慣にこうした長髪は適しているのであろうか。不便なことを承知しながらも、理髪すること、或いは短髪にすることに不都合が生じていたのであろう。長髪でありながらも戦闘時に動き易い状況にするには、油などを用いて髪を固めたと推測できる。何ら整髪をしない「ざんばら髪」での戦闘は映像的には迫力があるだろうが、実際の戦闘には不向きであろう。兵馬俑坑に並んだ兵士たちが単に儀礼のためや、始皇帝閲兵のために身支度・装備を行っているものではなく、日常の様子をありのままに表出しているものと改めて考えられる。

それでは、戦闘時において、整髪はどのくらいの時間がかかったのだろうか。そして、整髪剤（整髪油など）は何が原料となっていたのであろうか。一定の需要も見込まれば、それに対応する供給システムも成立していたことであろう。また滑稽で浅薄な見解ではあるが、軍隊の後部の相応の理髪師たちの行列も想像は付かないことから、一定の整髪に関する装備や整髪技術は各々が身につけていたことと推察できる。

特に人物俑の髮型を詳細に観察できるのは、頭巾や冠を被っていない円堆髻の人物俑である。

前頭部分（写真1左上）では、中央より左右半分に分けられているが、後頭部で三つ編みになるように、すでに三つの束に分けられて整髪されているのが確認できる。そして側頭部分において三つ編みがはじまっている。

後頭部分（写真1左下）では、前方左右からの三つ編み二本と後ろ髪を束ねた三つ編みを持ち上げ、後頭部中央で組み、さらに頭頂部右側（ないしは左側）でまるめて髻を結ぶ。秦俑研究の第一人者である袁仲一によれば、後頭部の結び方は十字形、大字形、卜字形、一字形、枝分かれ形、丁字形などに分類できるという⁽²⁾。なお、馬廐坑と珍禽異獸坑から出土している人物俑（髻座俑）の髮型は編まずに、後頭部でまるく結うのが特徴となっている⁽³⁾。

以上のことは写真図版などでも十分に確認ができる。発掘調査報告書を紐解くと、髮型に関する同様の記述がすでになされており、また頭頂部髻の髪の根元では赤いリボンもしくは縄で束ねられていると記載がみられる⁽⁴⁾。

2. 秦俑髮型の復元

筆者は2005年より3年余りほど理髪をしなかった時期がある。その際の「記念」として本稿で話題としている秦人物俑の髮型（円堆髻）を体験復元してみることを試みたのである（写真1右上・同右下）。これによって、判明したことは以下の通りである。



写真1 秦俑髮型と復元比較

- ① 髪の長さは腰中部が適当である。短過ぎると頭頂部での髻が結えない、一方で長過ぎると髻から極端にはみ出る。後者には工夫が生じる。それは、まるめる巻数に反映され、単台髻・双台髻・三台髻とした分類が調査研究ではすでに定着している⁽⁵⁾。
- ② 図版と較べて、三つ編みができる者が整髪を行ない40分弱を要した。油を付けていないことから多少なりの整髪しづらい点も挙げられる。また慣れれば15分程度の短時間でできることが可能であると推測できる。また三つ編みができる者ならば単独での整髪が可能であろう。余語であるが、戦場において兵士同志が相互に整髪を助け合っている光景を想像するだけでも、違和感を抱くのはわたしだけであろうか。現代人の価値観だけで済むであろうか。そのため、軍装における短時間中に髪型を含めた身支度を整えることは当然の所業であったと考える次第である。
- ③ 円堆髻の復元を通じて、扁髻では冠を装着する際に、後ろ髪の上げ下げだけで装着

が可能であることを改めて理解した。この点は階級・軍位によって髮型の差異を有するという見解に十分に合致する。

- ④ 髪が薄い場合などでは髻を結うのも困難であろう。そのために頭巾などの装着も必要だったのであろう。ただし、頭巾装着の秦俑には円堆髻の盛り上がりを確認できる。製備上での造形表現も関係するであろう。

3. 秦代の髮型にみられる習俗

なお、秦始皇帝陵兵馬俑一号坑の報告文献「小括」の中で、「秦俑の髮型は多様であり、その整髪についても研究に値することができ、こうした一側面からも秦人の現実生活を反映するものである。髮髻の基本はすべて頭頂部右側にあり、秦の習俗にあたって右を尊ぶもの「尚右」であったことを説明している」とある⁽⁶⁾。改めて円堆髻の人物俑を確認するとやはりほとんどが頭頂部右に髻がみられるが、一部には頭頂部左に髻を持つものがある(写真2)。例えば、蹲踞した格好で弩を持っていたであろう人物俑である(写真2左)⁽⁷⁾。このことは上記してきたような階級・軍位に拠るものであろうか。もしくは弩を使用する際に邪魔にならないように配慮しての所作なのであろうか。さらに1号坑のある隊列では兵士すべてが円堆髻を左に位置する(写真2右)。生来の秦人ではなく他国出自(自国が秦に滅ぼされた後に軍属したか)であり、地位が低い集団もしくは秦人部隊と視覚的にも区分されていたとの予想もできよう。この問題を深く検証するにあたっては、円堆髻人物俑における髻の位置が頭頂部左右のどちらにあるのかの実際を改めて確認すべきであり、そこから兵馬俑坑全体での配置などを検証すべきであろう。報告書等には髮型の大別配置の分布図はみられるものの、細別(円堆髻左右の別)は示されていない。現地での確認作業も必要となってくる。今後の課題としたい。

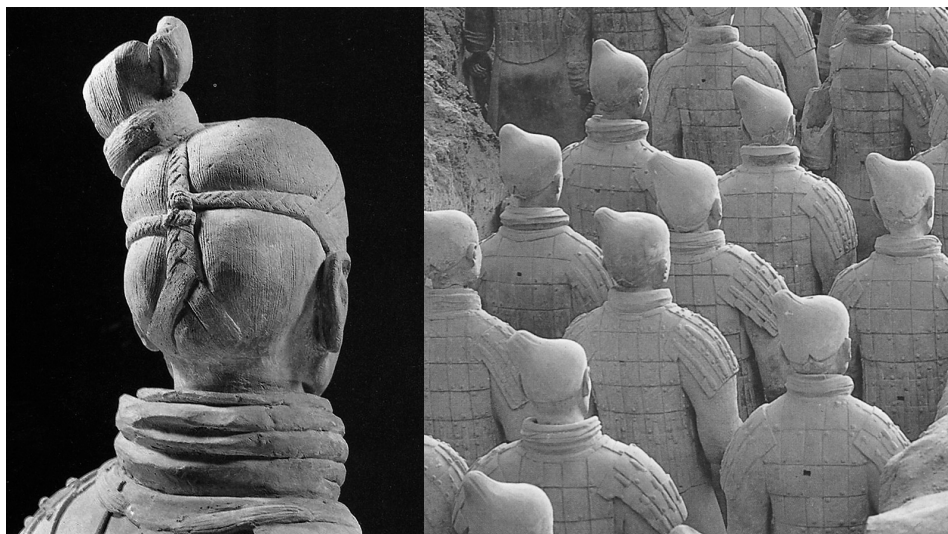


写真2 頭頂部左位に「円堆髻」をもつ秦俑

秦俑髮型小考

以上が秦俑髮型を通しての雑感である。

なお、本稿を草するにあたり、サイバー大学世界遺産学部専門講義科目「中国古代文化概論」の受講生たちにはディベートコーナーなどで議論にお付き合いしていただいた。また、雨宮加代子メンターには髮型復元でお世話になった。末筆ではありますが、感謝の意を表します。

注および引用文献

- (1) 例えば、大形徹 「被髮考」『東方宗教』第86号、日本道教学会、1995年11月、pp.1-23
- (2) 袁仲一 『秦兵馬俑坑』(20世紀中国文物考古發現与研究叢書)、文物出版社、2003年6月、p.192
- (3) 袁仲一 『秦始皇帝陵兵馬俑研究』、文物出版社、1990年12月、p.235
- (4) 陝西省考古研究所・始皇帝陵秦俑坑考古發掘隊編著 『秦始皇帝陵兵馬俑坑 一号坑發掘報告(上・下册)』、文物出版社、1988年10月、p.123
- (5) 前掲書(2)、p.189、前掲書(4)、p.122
- (6) 前掲書(4)、p.142
- (7) 前掲書(3)、図版二二

写真出典一覧

写真1 秦俑髮型と復元比較

左上；富山市教育委員会ほか編集『「東アジア文明の源流展」図録』55頁、富山市発行、1989年9月、p.55(部分)、右上；筆者撮影、左下；陝西始皇帝陵秦俑坑考古發掘隊ほか編著『秦始皇帝陵兵馬俑』102頁、平凡社、1983年9月、p.102、右下；筆者撮影

写真2 頭頂部左位に「円堆髻」をもつ秦俑

左；袁仲一『秦始皇帝陵兵馬俑研究』、文物出版社、1990年12月、図版二二、右；筆者撮影

Note of The hairstyle of Terracotta Warriors

Yoshiki KOYANAGI

The hairstyle of Terracotta Warriors of the Qin Shihuang Mausoleum is divided roughly into “扁髻 bundles type” and “冂堆髻 round-Topknot type”. These show the employment title and the class, and The fashion at that time is shown by long hair and the Right side of “冂堆髻” respects manners and customs, so “尚右 Shangyou”.

Through the restoration of the hairstyle of Qin clay, the length of the hair if the back central part degree was suitable, and Can do one's hair alone if it makes it to the custom.

There are a lot the Right round-topknot type, but also several the Left round-topknot type exists becomes an examination problem in the future.

Keywords: Qin, Terracotta Warriors, Hair-buns, Customs, Restoration